

P-164

骨盤臓器脱患者に対する専門外来開設後の現状と今後の課題

旭川赤十字病院

○^{すみよし}住吉 薫、^{かおる}高橋 和恵、長屋 千賀、吉岡 瑞子、玉手 健一

【はじめに】骨盤臓器脱（POP）は女性のQOLを阻害する疾患である。高齢化に伴いこの症状で悩む女性は増えており、A病院産婦人科外来においても受診者の約20%を占めている。治療として手術療法他、骨盤底筋体操、ペッサリーリング（以下、リング）、サポート下着といった保存的治療があるが、リングは感染や炎症などのリスクがあるため、自己管理が推奨されている。患者は高齢の方が多く疾患の理解、治療法の選択、体操やリングの自己着脱など説明や指導に時間を要し診療時間内での対応が難しいため、自費診療の専門外来「POP外来」を開設した。そこで、開設以降の現状を調査し、今後の課題を明確化することを目的とした。

【方法】2021年6月～2023年3月にPOP外来を受診した患者105名を対象とし、診療録から患者の年齢、使用リングの種類、自己着脱状況等を後方的にデータ収集し、集計した。

【結果】平均年齢73.9歳、リングの自己管理率はPOP外来受診前18.0%、受診後64.3%であった。年代別では60代が9.0%から90.0%、70代では28.6%から61.9%、80代では4.5%から40.9%であった。

【考察】POP外来受診前後のリング自己管理率の上昇の背景には、POP外来での指導体制の充実によって受診者のセルフケア意識が変化した事が考えられる。年代の上昇に伴って自己管理率が低くなっているが、80歳以上でも自己管理率が7割という報告もある事から、今後自己管理率を上昇させるためには加齢に伴う身体機能の変化や社会的背景に合わせて支援することが課題と考える。さらに、受診後の患者の気持ちの変化や自己管理困難な事例を調査・分析し、指導内容の充実に向けていきたい。

P-166

急性期脳卒中患者の代理意思決定支援に対する支援状況の調査と今後の課題

旭川赤十字病院

○^{やまなかえりこ}山中絵里子、川原 裕子、伊藤由紀恵、寺島こずえ、藤原 千夏

【はじめに】急性期脳卒中患者の家族は、突然の意識障害により代理意思決定を余儀なくされる。しかし、超急性期現場での家族支援に活用できる指針はなく、看護師が困惑している現状にある。そのため代理意思決定支援の充実を図る必要があると考え、支援状況を調査し今後の課題を導き出すことを目的とした。

【方法】A病院SCU病棟看護師40名を対象とした。先行研究を参考に家族の代理意思決定場面の支援内容について独自のアンケートを作成し調査した。調査内容は、看護師の経験年数などの属性、家族の精神的動揺、家族状況の確認と調整、疑問や不安の表出、病状理解に対する支援、及び医療者間の情報共有に関する設問10項目とした。対象を経験年数で3群に分け、kruskal-wallis検定で分析した（P値<0.05）。また代理意思決定における看護師の支援状況を自由記述で調査した。

【結果】回収数37名（回収率92.5%）。分析の結果、「代理意思決定のため疑問や不安を表明できる関わり」で経験年数1～3年目に於いて有意差がみられた（P=0.012）。また、全体の40%の看護師より、動揺している家族への声掛け、治療方針の選択に対する支援などに困難を感じているという自由記述があった。更に具体的な家族支援として、傾聴や共感、状態の説明、家族の理解度の確認など多様な関わりをしていた。

【考察】分析の結果、知識や技術・経験値の低さが、代理意思決定支援に関わる家族の思いを引き出す具体的な接し方に対する困難に繋がっていることが予測された。しかし、多くの看護師が対応に困難や葛藤を抱えながらも、患者や家族の気持ちに寄り添えるように関わっていた。看護師の経験やスキル、苦悩や葛藤を共有できる場や学習の機会を設けるなど代理意思決定支援の充実が今後の課題である。

P-168

看護師長のレジリエンス向上への取り組み

松山赤十字病院

○^{やました ひろこ}山下 弘子、^{あきの}矢野 明子、岡元 和恵、酒井 富美

【はじめに】A病院では、看護師長の（以下、師長）の6割が師長経験3年未満である。経験が浅い師長は、様々な不安を抱えながら看護管理を実践しており、役割遂行上で困難に直面しながら看護管理者として成長しているが、その過程は手探り状態である。そこで、困難をしながら乗り越える力「レジリエンス」を高めるため、グループリフレクションを開発した。

【方法】(1)人材育成をテーマに、3～4名のグループでお互いの看護管理実践事例を共有した。(2)リフレクション後、師長としての在り方や考え方・行動の変化をキーワードに書き出し、KJ法を用いてカテゴリ化した。

【倫理的配慮】A病院の倫理委員会による審査を受け承認を得た。
【結果・考察】グループリフレクションにより、「同じ悩みについて話し合い、対応を考えたことができた」「ポジティブにフィードバックを受けることで、大切にしたい看護や管理に気づくことができた」等の意見が聞かれ、自分の信念や大切な価値観を知る機会となった。また内発的動機づけとなり、自己の変化として10のカテゴリーが示された。師長は「管理観・看護観」を基盤に「対話」を重要としており、対話「リフレクション」によって取り組みの成果を「みんなの成果」として認めていた。そして日常的に「承認・感謝」を伝え、さらなる成果を期待して「任せる」ことでモチベーションの向上につなげ、「絆」を深めていた。時には自己「リフレクション」を行い、「頼ること」や割り切る「潔さ」を持ち、思考のバイアスを外すことで新しい管理観や価値観を醸成し、「課題の優先順位」に前向きに取り組んでいた。師長は看護管理実践を積み重ねるだけでなく、その経験を共有しリフレクションすることで、しなやかに折れない、看護管理者として成長していくことが示唆された。

P-165

肛門周囲瘻孔形成に対し管理方法検討により人工肛門造設を回避できた一事例

沖繩赤十字病院

○^{くずけん}久手堅みゆき、安谷屋寛子

【はじめに】肛門周囲瘻孔形成では排泄物による創の汚染を避けるため、人工肛門造設などの排泄経路の変更を余儀なくされることが多い。今回フルニエ瘻孔を疑われ肛門周囲広範囲に瘻孔形成、重度多発瘻瘻を有する患者へ管理方法の検討により人工肛門造設を回避できた事例を経験した。

【事例】A氏50代男性、自宅で衰弱し倒れているところを発見されICU緊急入院。会陰部・肛門周囲広範囲に瘻孔形成あり。重度多発瘻瘻を有していた。

【結果】敗血症の診断にて全身管理と同時に外科、皮膚科にて瘻孔管理が行われた。腹水貯留により人工肛門造設は行わず保存的治療を行った。プリストールスケール7が持続し創への汚染が懸念されたため排泄管理及び瘻孔管理方法を検討した。状態に応じて細かな修正を繰り返し、作成した手順書によりスタッフ間で情報共有した結果、ICUから一般病棟への移動後も統一したケアの提供に繋がった。さらに、栄養・薬剤管理による便性の調整も行い汚染の低減を図った。結果入院から78日目、瘻孔は閉鎖、瘻瘻も改善した。

【考察】排泄物による汚染を避けながら創傷管理は困難をきたすことが多い。本事例では局所の変化に応じて難渋するケア方法を検討、可視化し情報共有することで創傷治癒促進に繋げることができた。患者を取り巻く多職種で協働しながら局所管理の方法を模索しケアの遂行が効果的であったと考える。

【結語】今回の事例では皮膚・排泄ケア認定看護師の立場で、患者の状態に応じたチームに多職種で管理方法を修正しケア方法を可視化した。特殊なケアの標準化の継続で排泄経路の変更を回避できたことは患者のQOLに寄与する。

P-167

多部署連携による強いチーム作りを目指して

京都第一赤十字病院

○^{まつお}松尾おかる、磯崎 智愛、高橋 夕喜、樹下 昌子

【はじめに】A病院ERは高度急性期病棟救命救急センターの役割のため、救命センターにアンキオ室、手術室、院内ICUが協働体制で連携強化を図った。しかし重症者搬入時に対応する看護師にアンケートをしたところ、ERで勤務することの不安・ストレスを伴うことがわかった。ストレスが強いER応援業務に注目し、応援が通常と思える意識変革に取り組んだ。

【目的】重症患者搬入時、最大のパフォーマンスが発揮できるチーム作り

【目標】救命センターの役割の理解と重症患者受け入れの協力

【方法】期間：2022年10月～2023年3月 実施：「救命救急センターの役割」「多部署連携に向けた取り組み」「重症外傷患者搬入時の役割フロー」などスライド作成・OJT実施 対象：ERで重症患者に関わる可能性のある全ての看護師

【結果】OJTにより多部署連携に対する動機付けができた・必要時リリーフを行い相互協力の実践に繋がった

【考察】救命救急センターERに従事する看護師は各部署の集合体であるが、重症外傷患者搬入時を含めた応援に対し消極的な看護師は多い。患者搬送時に最大のパフォーマンスを発揮するには、部門横断的なチーム作り、人員配置、コミュニケーションの活性化が推奨される。救命救急センターの役割、多部署連携に向けた取り組みの再周知は救命センターの一員である自覚を促し、連携に対する意識向上、コミュニケーションの活性化、ER業務への消極的な感情の解消が期待できる。そして緊急時に協力し、役割遂行できるチームに繋がると考える。

【まとめ】今後の取り組みとして状況共有による応援人員の配置、手術室によるOP迎えやER応援を強化していく。

P-169

内視鏡室に勤務する看護師へのグループ・リフレクションの効果

諏訪赤十字病院

○^{みやまかかずの}宮坂 一乃

【研究目的】内視鏡室看護師の「看護観を自由に語り合うグループ・リフレクション研修」（以下リフレクション研修）に参加することが、看護師にとってどのような効果をもたらすのかを看護師の語りを通して明らかにする。

【方法】(1)研究デザイン：質的記述的研究。(2)参加者：リフレクション研修に参加した内視鏡室看護師5名。(3)データ収集方法：リフレクション研修開催後、個別に20～30分のインタビューを実施した。(4)倫理的配慮：諏訪赤十字病院研究倫理審査会の承認を得てから実施し、本研究における利益相反はない。

【結果】リフレクション研修に参加した効果として、以下の6つのカテゴリが抽出された。(1)内視鏡室でしかできない患者や家族との関わりがあることをありありと思出した。(2)自分の看護を振り返り改めて看護観を見つめ直した。(3)メンバーの看護観に興味を持った。(4)リフレクション研修の課題に気づいた。(5)リフレクションの機会が大切だと実感した。(6)内視鏡室で行うリフレクション研修に期待を抱いた。

【考察】(1)内視鏡室におけるリフレクション研修の看護の質向上に向けた効果：研修参加者は、自ら看護場面を詳細に語り、自分を見つめ直し他人に興味を持ち、内視鏡看護の向上に目を向けていた。今回の結果から、研修の継続による看護の質向上の可能性が示唆された。(2)内視鏡室リフレクション研修の課題：本研究において、メンバーから語るプレッシャーが示された一方、グループで語ることで自らを振り返る者もいた。内視鏡室看護師は一人でケアを行うことが多いため、あえてグループでの研修を行うことで、語ることのプレッシャーを乗り越えて、看護師同士が看護観を理解し高めあっていく可能性があると考えられる。